

1977 年 12 月 3 日 第三種郵便物認可(毎月 18 回 1・2・3・5・6・7 の日発行)
2025 年 3 月 22 日発行 通巻 8648 号 SSKP たこの木通信 449 号

SSKP

たこの木通信

449 号

(2025/3)



電話：042 - 389 - 1378

E-MAIL：takonoki@dream.jp

ホームページ：https://takonoki.net/

郵便振替：00100-2-24685

第3回たこの木連続講座は6月1日か22日になれうです() 2

「知的障害をもつ人への心理療法」の著者中島さんは三井さん著書の「知的障害・自閉の人たちとかかわりの社会学」のどういうところに惹かれたのでしょうか？そして三井さんは「知的障害をもつ人への心理療法」のどういうところに惹かれたのか？ まずそのことが私個人的には第3回目の連続講座で知りたい、確認したいことです。

すいません。かかわりの社会学連続講座3回目のことについてここ5日ほど真剣に書きながら考えていたらマジでメンタルやられてしまいました。最低です。胃痙攣を起こしたり、ちょっと介護の仕事や日常生活に支障をきたしてしまいそうな精神状態です。なんかふざけた最低な書き方をして申し訳ないのですが、ガチにコン詰めて書いたり、考えすぎた反動でこんな言い訳みたいなことを書かしてもらっています。すいません、でもマジでそうでもしないとやばいです。

講座は6月の予定なのでそれまでになんとか精神状態や考えを整えていこうと思うのですが、自分で勝手にコン詰めて考えているうちに気がついたら悲鳴をあげている状態です。自分が書いたことや考えたことに自分自身が押しつぶされしまったという感じです。あーまた胃が痛くなってきた。悲鳴をあげている。自虐してるみたいです。

6月の講座の私の密かなキーワードはこの「悲鳴」です。あと「絶望」です。このキーワードについて書いたり、考えたりしているうちに胃痙攣を起こしてしまったということです。絶望にいたっては「耐えられない絶望と耐えられる絶望」という言葉がここ数ヶ月私の頭につきまといて「悲鳴」というのはまさに「耐えられない絶望」の状態ですね。あー胃が痛い。

第一回目の講座が始まる少し前に三井さんは御自^分の著書「かかわり」の社会学について、実行委員たちのスラックというアプリに次のようなコメントを書いています。

「悲鳴に対して悲鳴で答えるのではなく論理で解きほぐすことを目指してました。」

これはかなりのメンタルのタフさが必要とされるのではないのでしょうか。そういう作業が安全にできる環境も必要だと思います。これまでにたこの木クラブとかで体験した「悲鳴」を脳内で何度も再生せざるを得なかったかもしれません。

ところで「悲鳴に対して悲鳴で答えるのではなく論理で解きほぐす」ことによってそれがいったい何になるのでしょうか。少なくともそれは「耐えられない絶望から耐えられる絶望」へ変化すると思います。私は毎週火曜日の朝行われるたこの木の会議に毎回のように「もう限界、無理、やってられない」というような言葉を吐いてまるで横田の愚痴の時間と化しています。私の人間の器というのがほんとに小さいからだと思いますがいろんな場面で耐えがたい絶望感を味わい

ます。あーちょっとまた胃が。それでもたこの木で活動続けているので耐えられる絶望だったんだと後でそんな気持ちになるのです。

ウクライナやパレスチナで現在起こっていること、もうこれはほんとうに耐えられない絶望です。普通に生活している一般市民のところいきなり爆弾が飛んでくる。こんな絶望ってないっていうくらい絶望な訳ですがそんな現在進行形の出来事をテレビやパソコンでしりがらそんなことはまるでないかのように私たちは暮らしている。そのこと自体どこか絶望的なんだけどそれは私たちにとっては耐えられる絶望。

人は希望に向かって進んでいく、希望を探し求めてとか絶望から希望へとかちょっとそういうのは今の若い人下手すると子供ですら一般的に胡散臭く感じているんじゃないでしょうか？

より豊かな社会を目指すって言う政治家と持続可能な社会を目指すって言う政治家、あなたはどっちの政治家を信用しますか？

持続可能な社会ってなんかもう絶望的ですよ。社会が世界がいつ破壊してなくなってしまうてもおかしくないというリアルな危機感が一般に広まってないとこんな言葉ハヤリません。逆にこんな時代に及んでより豊かな社会を目指すなんていうてるやつってなんか詐欺師っぽくないですか？

すいません、メンタルやられついでに昨日考えたメモしたのを貼り付けただけです。

「絶望と希望の間を生きている」というよりは「耐えられる絶望と耐えられない絶望の間」を生きているという感じで生活している気がします。というかそうありたいなというか、そっちの方が地に足がついている生活というか。悪くはないけどこう幸せというか。あーあと数時間後にはガイヘルの仕事があるというのになんなんだこのダークなモードは。これからメンタル整えてガイヘル行ってきます。講座ご参加よろしくです。

ここまで書いて一日経ちました。明日はたこの木通信発行日です。お見苦しい文章で大変申し訳ありませんが毒を吐いて楽になりたいそんな思いでこれを通信に載せます。

絶望(という言葉)との距離の取り方を間違えてしまったのでしょう。それで胃痙攣を起こしてしまった。貴重な経験をしたと思います。今でも若干胃に違和感がありますがその手のガス抜きには少し自信があります。絶望というものに直接触れたり急にガチで向きあったり距離感を間違えたりするとそれはもう悲鳴をあげるしかない、その辺りは今後やはりもっと勉強し注意深く慎重にならなければならないと思います。そして安定した精神状態で日常生活を送れるよう心がけたいです。(横田)

【すいいち企画しませんか？】

岩橋 誠治

時は年度末。新年度に向けての助成申請や今年度の報告書類に取り組む季節。つくづく私は事務作業が苦手であると実感させられる季節でもあります。

先月、当事者たちの呼びかけによる餅つき企画の様子をお伝えしました。「すいいち企画は、当事者たちによる企画の場」でもあるのですが、企画と言うのは「立案」から「実施」に向けては様々な事柄があり、その一つ一つを当事者のみで行うというのは非常に難しい事です。だからと言って、かつてたこの木として様々な企画を出して参加者を募るという形には戻りたいとは考えていません。ならば、想いの実現に向けてともに取り組む様々な方の参加が不可欠だと思っています。

「今年も餅つきがしたいね」と言う当事者の声から始まり、実施に向けて当事者自身で動ける事や動けない事。ほんの少し手伝えればあとは当事者自身が展開することもあれば、周囲の人たちが想いを受けて動くこともあります。それらが上手くかみ合って餅つきをともに楽しむ事ができました。

「ブドウ狩りに行ったね」「お花見たね」「青年旅行ってあったよね」と当事者たちから語られる時、それが思い出話ではなく、「又やりたい！」と言う要望に聞こえるのですが、「ぜひぜひ、企画してよ！！」と返すに留める私がいいます。

知的当事者たちの「自己選択」「自己決定」と言って、「選択肢がなければ選ぶ事もない」「決定しても実現できなければ半ば意味がない」と言う事では、様々な選択肢をすいいち企画に持ち込んで欲しい。自己決定が自己実現につながるように、様々な人と楽しく企画を立てて実現のプロセスの経験をともに築きたい。

そんな風に考えるも、日常の取り組みにこれ以上声をかけられてもそのプロセスに関わり切れない現実。

すいいち企画が、当事者たちの場ではなく様々な人が交わる場として、又当事者企画と言う事で当事者のために動くというよりも当事者たちと楽しみたい人とともに企画を立てる場として、様々な人の参加と企画の持ち込みを歓迎しています。

最近では、言っても何も始まっていけないと当事者たちは描くのか？TKC 主催の「たこ焼きパーティー」を巡る会話がすいいち企画の場で盛り上がり、「岩橋さんも参加してよ」と積極的な参加を当事者たちから声かけられています。(先日「たこバにどうやって行く？」「帰りはどうする」と当事者たちが打ち合わせしていました)

すいいち企画で出会った人たちが、各々の日常のイベントに誘い合うというのも楽しいかも。「こんなイベントを開きます」という情報提供のための参加也大歓迎。

様々な形ですいいち企画と関わる機会があればと思います。

「地域を施設化」していこうとする国の施策を下支えするような気がしました。

それは、「知的当事者の自立生活」を支援する想いがあっても、制度が進むにつれ「儲け重視」で「お金になるから重度訪問介護事業に参入する」事業所と同様に扱われ、一度そのような事業所が問題を起こせば、たちまち真摯に向き合っている人たちを締め付け、事業を維持するためには当事者を管理しなければ成り立たなくなっていくかもしれないと描くからです。

「悪しき就労継続 A 型問題」や「放課後デイサービス事業の資格要件」や「大規模グループホーム」等々。懸命に当事者支援を考え国に訴え法律や制度化に努め拓かれるも、それを利用し、そこを草刈り場として福祉ビジネスとしてコンサルタントが「儲かります」と呼びかけ利用の拡大を図る。制度上の形ばかりを整えるも、人と向きあう事業故に形ばかりでは成り立たないことが生じ、それでも儲けを出すことだけを思考すると様々な問題が起こる。すると、国や行政はたちまち自らの責任回避のために事業所を締め付けていく。

昨今、「重度訪問介護専門事業所」なるものが増え、一見支援のすそ野が広がっているのかのように見えるのですが、「専門」とし事業を担う人たちは、重度訪問介護を費用対効果で考え効果がないとなれば、手を引くのではないだろうかと思ってしまいます。

私が初めて重度知的当事者の自立生活に関わったのは 40 年前。当事者制度も乏しく支援のほとんどをボランティアと言う形で担っていました。その時代に戻れとは毛頭思いませんが、当時描いたことは、障害者である前に「生活者」であり「同じ地域に住む存在」である事が容易に実感できたし、制度がなかった故にそこを強調しなければ支援を担う人を集める事ができませんでした。誰も同じく「他人」として関わられた時代でもありました。それがいつしか「職としてかかわる者」と「そうでない者」に分かれ、制度が進むにつれ拡大し、いつしか「その人たちに任せておけば安心」となり、当事者との関係を皆で考えるよりも、当事者を支える人たちのことを考えるようになり、さらに 24 時間の支援体制が組まれるとまったくもって地域の人たちとの関係が希薄になってきたように感じます。

そのような変化を当時子どもであった人たちが成人し自立生活に至る過程の中で見てきた私と、大人になった当事者のその前を知らない人たちが事業として当事者と関わ状況。昔に戻るといっても、前を知らなければこれからを当事者とともに何をいかに築いていくかを思考し、その実現に向け重度訪問介護をいかに活用していくかを思考する必要があるように感じます。

私が一番に考える「内容の拡大」は、重度訪問介護を使いいかに地域で暮らす人たちとの接点を築いていくかという点。

先日、行動障害の激しい当事者と大型スーパー内をウロウロしていたら「お父さん。大変ですね～」と声をかけられました。ちよくちよくある話で「いや。お父さんではないのですが・・・」と戸惑いつつ返事をすると「あっ。ヘルパーさんですか」と返されました。それはこれまで言われた事がなかったので別の意味で戸惑いました。それは、「ヘルパーを使って暮らす人がいる」と言う事が地域の人に認知されつつあると思った瞬間だったからです。当事者や家族や行政に訴える事はとても重要な事だと思います。それと同様に、地域の人たちに対してもその存在や関係を知らせ、ともに存在していることを確かなものにするための重度訪問介護を考えたいと思います。

なん こうせいろうどうしょう こうしょう きかく じぶんかつどうか ささきのぶゆき
「何のための厚生労働省の交渉なのか」 のぶ企画 自分活動家 佐々木信行
なかま かね じかん こうしょう のぞん くに

ピープルファーストジャパンの仲間がお金と時間をかけて交渉を望んでいるか国として
りかい

理解をしてもらいたいです。

こうしょう はなしあい さんねん

ただの交渉じゃなく話し合いしかすぎません。そこがとても残念です。

くに にゅうしょせつ ふしぎ

それなのになんて国は、入所施設をつくりつづけるだろうか。とても不思議であります。

だいきぼ にゅうしょせつ あたりまえ

大規模なグループホームをつくったらまるで入所施設とかわりありません。当たり前の
ようにサービスをつくってもらいたいです。

くに いま せんもんか はなし きい せいさく にゅうしょせつ

国は今も専門家の話しをよく聞いて政策をつくってしまいます。入所施設をなくして

とうじしゃ こえ きい

いくために当事者の声もちゃんと聴いてほしいです。

つくい えん じけん おき にど おき

また、津久井やまゆり園のような事件が起きてしまいます。もう二度と起きないようにいく

にゅうしょせつ

ためにも、入所施設をなくしていかなければなりません。

なまえ だいきぼ でき

名前をかえて「大規模なグループホーム」をドンドン出来てしまいます。

こえ うったえつづけ

もっともっとピープルファーストジャパンとして声をだして訴え続けてしくしかありませ

かわり

ん。そこまでしないと変わりません。

ひとり ほんき くに たいし うったえつづけ

一人ひとりが本気になって国に対して訴え続けていきましょう。

しん せいかつ

真の「のびのびゆうゆう」とした生活にしていこう。

ようぼう

ピープルファーストジャパンの要望

にゅうしょせつ きげん きめ けいかく たてろ あたらしくつくら

①入所施設をなくせ(期限を決めた計画を立てろ・新しく作らない)

ちいき くらせるせいど

②地域で暮らせる制度をつくれ

ひとりぐらし しえんしゃ

(グループホームのこと・一人暮らしのこと・支援者をふやす)

けんり ぎやくたい じょうほう ほしょう

③権利をまもれ(虐待のこと・情報保障のこと)

しえんしゃ ささき ききとった

[支援者むらまがつが佐々木くんから聞き取ったこと]

こうろうしょう たいおう

・厚生労働省の対応にガッカリした。

じぶん たいけん しつもん ひとこと へんじ

自分の出した意見や質問に、一言も返事がなかったから。

えんじけん しせつ つくりつづける こうろうしょう かいとう おや

・やまゆり園事件があったのに、なぜ施設を作り続けるのか。厚生労働省の回答は「親の
いけん だいじ いりょうてき しゃ にゅうしょせつ ひつよう

意見も大事」「医療的ケア者は入所施設を必要としている」

1977 年 12 月 3 日 第三種郵便物認可(毎月 18 回 1・2・3・5・6・7 の日発行)

2025 年 3 月 22 日発行 通巻 8648 号 SSKP たこの木通信 449 号

ちてきしょうがいしや しせつ はなし ふしぎ かんけい

知的 障 害 者 の 施 設 の 話 を し て い る の に 不 思 議 。 関 係 あ る の ？

もんだい ていいん じゅうにん おお にゅうしょしせつ おなじ

・ グループホームの問題 定員は [10 人は多すぎる!] 入 所 施設と同じ。

ごにん おおい じぶん ごにんかぞく おもう ふたり おおい

[5 人でも多い!] 自分は5 人家族だったから そう思う。 [2 人でも多い!]

ひとり あった せいかつ おくる

グループホームは一人ひとりに合った 生活を送るところ。

じぶん かね

・ 自分からみたら グループホームはお金もうけのためにやっているとみえる。

おうめ ぎゃくたい してい とりけし しょうがい おもひひと

青梅の 虐 待 で指定取り消しになったグループホームでは理事長が「障 害 が重い人をみ

なに わるい いった おこって

て何が悪いの？」と言った。こんなことやるなら、なんでやったんだ! ? と 怒ってやりた

い。 おうめし ひと ひとり いばらき ひと

・ 青梅市の人 は 1 人だけ。茨城の人 もいた。

にん ふた おうめし ひとり にん ほか く しちょうそん

[30 人のグループホームが 2 つあり青梅市の人 は 1 人だけ。59 人は他の区市 町 村の

ひと たけん ひと くぶん ご ろく ひと ぎゃくたい かんし ふせいじゅきゅうにおくえん

人、他県の人 も。区分は5 や 6 の人ばかり。虐 待 ・監視カメラ・不正受 給 2 億円・

こうちんさくしゅにひやくまんえん

工賃搾取 200 万円]

ぜんこく あつめ もんだい

・ グループホームは、なぜ全 国から集められるのか？ これは問題です

はちねんまえ うつのみや ぎゃくたい おおけ が はちおうじ

[8 年前に宇都宮の GH で、虐 待 で大怪我をおった なかまは、八王子の なかまでした。]

ちいき なか しょうがい あたりまえ せいかつ

・ 地域の中で 障 害 があっても 当たり前 に生活できるように サービスをつくってもらいた

い です。 にゅうしょしせつ ありかたけんとうかい とうじしや はいっ せんもんか もんだい

・ 入 所 施設の在り方 検討会に当事者が入っていない。専門家に問題がある。

さんがつじゅうににち ち ば さい ちちおや ころさ じけん さいばん

【3 月 1 2 日 千葉で 44 才のなかまが 父 親 に殺された事件の裁判がありました】

くに もんだい しえん もとめ ことわ しえん

これは国の問題です。サービスがないから 支援を求めても 断 られている。支援がないか

ほんにん こえ とど かぞく せいかつ おや こども ちいき

ら 本人の声が届かない。家族だけの生活 いつまでも 親だけが子供を みる 地域のサ

おき

ービスがないから こんなことが起きてしまう。

ひつよう しせつ だれ ちいき せいかつ せいど つくれ

[必要なのは施設じゃない!] [誰でも地域で生活できる 制度を作れ!]

たいかい イン かながわ

今年はピープルファースト大会 in 神奈川です。

がつ にち どのよう にち にちよう よこはま

11 月 29 日 (土) ・ 30 日 (日) 横 浜 の「みなとみらい」でやります。

♪ みなさん きてください ♪

浜島恭子

一昔前、2000年代に精神医療改革をした英国保健省のガイドラインの1つの英日翻訳を担ったことがあった。精神保健に従事する者はすべて、ヘルパーを含め、持つべきとされる10共有原則¹の中に、「安全と積極的にリスクを取るものの両方を促進すること」、とあって、かなり無茶を言うなと思ったことを覚えている。

しかし、この原則があることで、「これはアリなのか?」「これはヒヤリハットなのか?」「このリスクは取るべきか?」「こうあるべきでは」「いやしかし…」などの話をひらくきっかけになるかもしれない、と15年後の今頃思い返している。話のきっかけを作るための一助としてこれらのガイドラインが存在するのかもしれない(たくさんのガイドラインが発行されていて、現場の一人は「誰も読まない」と言っていたが)。

三井さよさんの本(『知的障害・自閉の人たちと「かかわり」の社会学』2023、生活書院)を

読んで、実際にあったことの捉え返しの繰り返し実践の場で行われていることと、その捉えなおしに際して、一緒にやる他者(自分たちのやっていてわかっている人・見ている・自分もやっていてわかっている人)が不可欠であることを学んだ。時間刻みの一人ヘルパーの現場は、本人とヘルパーだけ、誰も目撃していない。定期的にカンファレンスを実施する組織だったとしても、時給ヘルパーはその時間に参加できないことがほとんどだ。捉えなおしの機会がさりげなく、負担少なく、得られたらよいのだが。

先日あったオンラインイベント²で登壇者の1人が<自分たちのしていることは、生活支援であって、自立生活とは言えないのではないかと>というニュアンスの発言をしていたことが頭に残る。生活支援のサービスが—どんなに細々としたものでも—、地域にあることが第一歩で、他のさまざまな登録ヘルパーさんたちに会えるのが第二歩かもしれない。さて、どうやったら会えるのだろうか。

(はましきょうこ 雑誌家ときどき支援員)

¹ DoH, 2006, "The 10 Essential Shared Capabilities (ESC) are a description of the core aspects of practice that support effective implementation and delivery of mental health care." 英国保健省「メンタルヘルスの実践に不可欠な10の共有された能力」：パートナーシップで働く(Working in Partnership)、多様性を尊重す(Respecting Diversity)、不平等への挑戦(Challenging Inequality)、倫理的実践(Practising Ethically)、回復の促進(Promoting Recovery)、人々のニーズと強みを特定する(Identifying People's Needs and Strengths)、サービス利用者中心のケアを提供する(Providing Service User Centred Care)、違いを生み出す

(Making a Difference)、安全と積極的なリスクテイクを促進する(Promoting Safety and Positive Risk Taking)、自己開発と学習(Personal Development and Learning)。この最後の自己学習については、同時期にヘルパーは研修前と後で収入に変化はなかった—というペーパーを読んだ記憶を思い出す。

² 2025年3月1日 オンラインシンポジウム：知的障害者の自立生活 これまでとこれから、知的障害のある人の自立生活について考える会 主催

<https://jirituseikatu.jimdofree.com/2024.04.29/>

「時間」70

時が過ぎさって中年になった。今の自分が何を望んでいるのか？何となくわかるようになった。

僕の望むものは専門的な技術を得たいと考えている。具体的には英語の通訳になれるぐらいの知識を身につけたいと思っている。

将来といっても、後少しであるが、フィリピンに住んでみたい。日本の様に時間に追われる事もない、そんな生活を送りたい。そして、できれば大学にもう一度、入りたい。自分の残り時間を考えて、何ができるかはわからないが、何かを残したい。これが今、望むものである。

そして、それが叶ったら、自分の人生に納得行くだらう。

鷹野 洋(がんの ひろし) CVV の当事者スタッフ、元介助者

CVV(Children's Views and Voices)とは、子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している団体です

。『社会的養護の当事者支援ガイドブック

CVV の相談支援』

Children's Views & Voices+長瀬正子著

頒価：900 円

問い合わせ

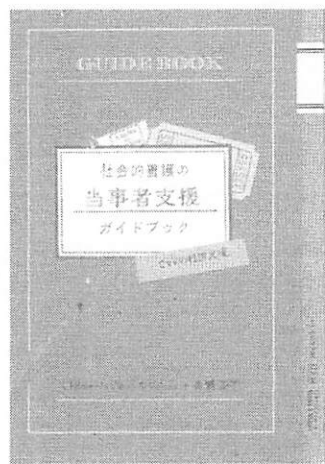
大阪市北区西天満 4-1-4 第三大阪弁護士ビル

503 号 葛城・森本法律事務所内

CVV 事務局

TEL：06-6130-2930 fax：06-6365-1213

MAIL：yes_cvv@yahoo.co.jp



死なないための家2

死なないための「屋根工事」

あ

荒川修作氏のアイデアを理解したい。なんで「死なない」になるんだろう。前回「難解だ。わからない」ばかり書いてて駄目だと思う。2007年の著書『死ぬのは法律違反です』の『人権宣言と建築的身体』という章の「第17条」(下線はあ):

人は一般に信じられている以上に、はるかに広範囲な領域を占める。人は、みずからを巻く限界を拡張するものだとみなされるべきである。すなわち人はまさに「建築的身体」だと捉えられるべきである。人がそうであるように事実自由なものと生まれ、有機体として狭く厳密に制約されて生まれるのだから、人はみずから自身を自由で平等な権利をもつものへと作り上げ、発明していくための手段(すなわち戦略的に設定された環境配慮された住居)が提供されなければならない。《略》

ぼくなりの理解:

- 「人」と「物質・有機体としての身体」を分けて考える。「人」の本来持っている自由・権利は無限なのに「身体」は制限されている。
- 人は、制限された身体を拡張し、新たに発明し、生きている間「増築・改築」しつづける「建築的身体」である。発明のための家が必要だ。

なんで家なんだ。続けて「だから人は死なないんだ」と当然のように書き始めて、「ちょっと待つて」っとなる。「生物としての死」が「有機体としての身体に課された制限」の究極のものだから、「建築」し続け、制約を突破し続ければ、死から距離をとれる、ということか?『生命の建築』という対談集にヒントがあった。肉体として滅んでも、概念としての死はない(拒否できる)という感じかな。

自分に関係のある近所の環境は、私の延長であり、その延長は私のようなかたちをしていないけれども、同じ現象を歩むことが理解できれば、私といわれている肉体がこのまま消えていったとしても、それほど恐怖に思わないでしょう。

屋根工事の話をしたい。通信に載せられるように小難しい話を絡めるが、リフォームの成果を聞いてほしいのが本当だったりする。屋根は面白い。住宅地の家の大半は木造2階建て。瓦か鋼板か下からすぐ見える、もっとも身近な屋根が、もっとも人を遠ざけている。むしろ人を「殺しに」かかっている。雨の多い日本の屋根は「早く水を流す」ことを最優先に作られているから取っ掛かりがない。「落ち葉」でさえ水が滞留して屋根を痛め雨漏りになる。木造だと雨漏りでぜんぶダメになる。上に乗ったものを早く勢いよく地面に落とす強い意思を感じる。実際、もともと産業別でもっとも死亡事故の多い建築業の中でも、一番死ぬのが屋根工事だそうだ。

1977年12月3日 第三種郵便物認可(毎月18回1・2・3・5・6・7の日発行)

2025年3月22日発行 通巻8648号 SSKPたこの木通信449号

「オール電化」にしようと思って、引き渡しのすぐ後でガス設備を撤去した。「築古だけど設備はいいんです」というのがしなかった。その後で、電気設備が古すぎて、オール電化にすると費用が大変なことになると分かった。また付けなおすのも面白くないので、屋根の「太陽熱温水器」で「ガス代ゼロ」がいいと考えた。大きな設備を屋根に載せられるか。ベランダに脚立を立てて屋根に上がろうとした。すぐ怖くなって撤退した。まったく手が届かないなら無理だから怖くない。脚立に上ると顔の高さに底が来る。しがみつけば行けるかもしれない。一度はうまく行っても、次かその次で転落して多分死ぬ。

荒川さんの岡山の美術館、岐阜の公園に関する記述では、とにかく「バランスを失わせることが重要だ」と書いてある。バランスが取れる、意識しないで動ける場所では少しづつ「死に向かっている」。荒川さん「絶えず環境を慣れ親しんでいるものによって、誰もが前に進んでいるのだ。この習慣的でかつ死をもたらしプロセス(略)」と書いている。TV番組で、子どもたちを前に坂を駆け下りて、坂の下を指さして「僕が外に出ていっちゃうんだ。外に出ていった僕と話をするんだ」と話した。バランスを失ったときに自分の存在を確かめることができる。多くの人は、怖くてすぐにそれを引っ込めてしまうが、できるだけ維持したほうがよい。

最近、落ちる心配のないハシゴが完成したところだ。昨日は太いワイヤーを張って家の柱と結びつけた。転落防止ハーネスをつないで次は掃除してペンキ塗りに入る。厚労省のページを見ながら一応安全対策やってる。屋根の上で所沢の強風にあおられる状況は、かなり天命反転に近づいてる。

2月は屋根のことばかり考えていた。コンクリ瓦という、今は使われない傷みやすい造りだ。雨漏りはないが瓦はかなり傷んでいた。新居の一番の弱点だった。「葺き替え」が一番よさそうだが、大金がかかるし、DIYなのに屋根がプロの手でピカピカでは気分がよくない。新居の屋根は作りが単純で「二寸勾配」という傾斜が緩やかなタイプで作業できそうだった。

もう一つ、久々に会った幼馴染に「彼なら分かってくれる」と思って話したら全く伝わらなかった「理由」がある。脚立に上って「怖い」と思ったとき、過去の「山登り」のことを思い出した。有名な「剣岳」の、ハシゴで登る難所。昼前に山頂に着いたけど雲の中で何も見えない。回復しないかと待っているとむしろ悪くなって慌てて下山した。垂直の壁をハシゴで降りる難所が、ちょうど屋根から下を見下ろすような感じだった。その時は下から霧が吹き上げて何も見えない。霧といっても濃くて渦巻いていて、「ナイヤガラの滝」が、上下逆さに落ちている光景だった。文学的表現でなくリアルに生きた心地がしなかった。

つまりスケジュールをミスったのである。ネットに上げたら「山を舐めるな」と袋叩きにされる類の行動である。「スイマセンまたやってしまった誰かに怒られる」と頭の中でぶつぶつ言いながら下山した(一般ルートでまだ明るかったので死ぬ感じではない)。怖いと思って引き返せないで、ずっと「自分」は体を出て、絶壁の下に叩きつけられていた。あれは「悪い天命反転」だった。新居の屋根でも、体を出た自分(イメージ)は玄関前に落下して廃材に突き刺さっていた。今度こそ、ちゃんと、前向きに天命反転したいものだ。

たこの木インフォメーション

たこの木クラブ公式ホームページの URL は、<http://takonoki.net/> です。

◆会員募集募集中！

2025 年度会員登録をお願いします！

たこの木会員 ¥6,000/年 賛助会員一口 ¥3,000/年

通信購読会員 ¥1,200/年 目標額 120万!!

郵便振替 00100-2-24685 たこの木クラブ

銀行振込 三井住友銀行 永山支店 普通 6424332

※銀行振り込みをご利用の方は、メール等でご一報いただくと
ありがたいです

★引続き重度訪問介護対象拡大を巡るイベント実行委員募集中！

・前号でお知らせした実行委員募集。引き続き募集しています。関心のある方は是非ご連絡ください

・実行委員応募方法：メールにて応募（宛先：takonoki@dream.jp）

件名：「重訪拡大実行委員応募」

内容：氏名・住所・電話番号・所属とか立場とか・

（重度訪問介護に対する想い←任意）

◎詳細は、たこの木クラブ岩橋までお問い合わせください。

※譲ってください

書き損じのはがき・年賀状

事務用品（ノリ・セロテープ・ハサミ等）

※大量のクリアファイルを頂きました。

ご入用の方にお譲りします！

●たこの木通信PDF版お届け中：

通信のページ数並びに発行部数が増え続ける中、

よろしければPDF版で受け取り可能な方は

お申し出ください。

※YouTube たこの木チャンネル開設中！

※詳細は、たこの木ブログでご確認ください(<http://takonoki1987.seesaa.net/>)

たこの木通信ご投稿お待ちしております！

※B5版1枚単位でお願いします！！

※ご投稿の締切は第3木曜日発行作業日の前の月曜日必着です。

但し、ページ割の都合上、ご投稿される方は、発行月の前月末までにご連絡を！

※連載記事も歓迎！通信の感想や日々の出来事や想い・イラスト等なんでもOKです。

たこの木関連本販売中！

「良い支援？」「ズレてる支援！」「支援のてまえで～たこの木クラブと多摩の四十年」
「知的障害・自閉の人たちと『かかわり』の社会学多摩とたこの木クラブを研究する～」
三井さよ

PDF 版たこの木通信 DVD(準備号～400 号) 頒価 3000 円

※たこの木ひろばで購入できます！

テレホンカード販売中：災害時、携帯よりも公衆電話の方がつながりやすい！500 度数
＝400 円でお分けします。NTT の固定電話の通話料金の支払いにもご使用出来ます。

《定期の予定》

・毎週水曜日 13:00～18:30 すいいち企画 たこの木ひろばにて

・第3木曜日 10:30～17:00 たこの木通信発行作業日

＜その他の予定＞

・フィットする支援をめざす会 4月8日(火)19:30～ZOOM及びたこの木

【急募！！居宅介護崩壊！！介助事業所募集中】

・月～金曜日 8:00～9:30 と日曜日 11 時～20 時の居宅介護と移動
支援を担ってくれる事業所を探しています。

・対応可能な居宅介護事業所がありましたらご連絡ください

・「施設を出て地域での暮らしを始めたい」と願う人からの相談
三多摩地域で暮らしを考えています。

自閉症を伴う重度知的当事者で、長時間の重度訪問介護の利用を
メインで支援体制を組んでいく事になると考えています。

関心のある事業所・派遣可能な事業所がありましたら是非お声掛け
ください。

詳細は、追って伝えていきたいと思います

急募！！たこの木通信発行作業を手伝ってください！！

ここ最近、人手が集まった方たちの負担が増えています。毎月出なくても、
少しの時間でも結構です。たこの木通信の発行作業を手伝ってください！！

日時：毎月第3木曜日 10時半頃～最大 17 時(作業が終わるまで)

場所：多摩市関戸公民館(作業する部屋は毎月変わります。通信でご確認を)

2025 年4月は、8階和室です

知的障害者の自立生活（支援付きひとり暮らし）に関する課題？

（「ほんの紹介」してない 85 回目）

大田区の相談支援専門員のネットワーク・連絡組織である「相談支援連絡会おおた」で重度知的障害と呼ばれる人の自立生活（支援付きひとり暮らし）について事例発表をした。以下はそこで配布するために作成した資料。後日若干補足した。足りないところがあれば、補足したいのでコメント募集中。~~~~~

知的障害者の自立生活（支援付きひとり暮らし）に関する課題

・それが可能であることが知られていないこと。（当事者・家族・支援者・行政）

そのために「知的障害のある人の自立生活について考える会」があるともいえる。

・他のものと同様の生活を送る権利という視点の欠如

障害者権利条約 19 条に定められている。日本政府は権利を保障する義務があり、その権利への人びとの理解と理解を得るための取り組みも必要

・重度訪問介護を受けられる枠が狭いこと。（行動障害の点数）

しかし、重度訪問が使えない人の一人暮らしが不可能かと言えば、そうではない。

職場や B 型や生活介護といった日中活動の場があれば、朝・夕数時間の介助体制で、支援付き一人暮らしが可能な場合はある。また、重度訪問介護が使える人とシェアハウスで同居していた事例もある。

・コーディネータと介助者が必要となるが、その数や体制が十分ではないこと。

例えば、経験を共有する場としての「知的障害のある人の自立生活について考える会」コーディネータグループ。コーディネータを養成する支援が必要。また、どのように介助者を確保するかという課題も大きい。

・意思決定を支援する仕組みへの理解

複数の支援者や関係者が当事者の意思について、話し合い確認する場の必要性。多くの自立生活（支援付きひとり暮らし）の現場でそれが持たれている。

例えば、ある事例では、日常的な IT ツールを用いた情報共有（スラックやストック）。月に一度の生活会議（各事業所から 1 名ずつ、母親、相談支援事業者）、数か月に 1 度の支援者全員の会議。

・体験できる場所がほとんどない

やはり知的障害のある人の場合、何をしたいかを読んだり、話を聴いたりして理解することが難しい人は多い。体験をする場所がない。例えば大田区の場合、ショートステイは施設であることが多く、ショートステイを体験して、もう嫌だという声はよく聞く。支援付き一人暮らしを体験し、親の家を出ることが嬉しいと思えるようなショートステイが必要。

・保護者との関係の整理

一筋縄ではいかない保護者との関係、一人ひとりの状況によって異なるが、一人暮らしを始めるにあたって保護者の理解は不可欠。しかし介入し過ぎも課題。

・経済的な課題

当事者の年金や手当、その他公的支援が、世帯全体の生活費などになっている場合もあり、自立生活のためには、それに部分的にも依存している家族の生活を支援する仕組みも必要となる。

・地域とのつながり

これは岩橋さんからの大切な指摘。これって、自立生活だけの課題ではなく、GH で暮らしていても、家族と暮らしていても、大切な課題でもある。

つるたまさひで（相談支援事業所ここん/知的障害のある人の自立生活について考える会/丸木美術館/他）

「一人暮らし」という名の「施設」

岩橋 誠治

昔、グッドライフ代表の石田氏に「岩橋！！僕と一緒に施設解体しよう！」と顔を合わすたびに、繰り返し呼びかけられました。その度私は「石田さんには入所施設を解体してもらい、私は施設に入れない方で頑張ります。そうすれば結果入所施設は無くなりますよね」とやり取りしてきました。

又、今は亡き新田勲氏は、「入所施設は必要」と言っていました。それは決して入所施設を肯定している話ではなく、「入所施設がなくなれば、仲間たちが殺される」という現実から発せられた言葉でした。

お二方の存在は、今なお施設入所を願う親御さんやご家族がいて、障害福祉計画の地域移行支援事業で掲げられた数値目標以上に施設入所を希望する数の方が圧倒的に多い現実を前にいろいろ考えさせられます。

過去、障害福祉計画策定委員を担っていた時、地域移行の数値目標を実現するためには、他のサービス事業の数値目標が妥当かを問いました。すると、まったくそこに関連があるとは気づかない行政職員。「それでは、地域移行が叶ったのちは自助努力で暮らせという事か？」と問うも、第1期は「動向を見守る」第2期目は、数値目標が下方修正された事への言及がない。その後、期を重ねても「地域移行」を巡っての展開が進むことはありませんでした。

ここで言うところの「地域移行」というのは、社会的入院を強いられている精神当事者たちを想定しているのですが、精神科病院であれ入所施設であれ、障害を理由に社会から隔離されてきた状況は、今日に至ってあまり改善されていないというか、一部良好に進んだ分、制度等に乘れなかった人たちはますます厳しい状況に追いやられていると感じます。

そして、それらの状況を下支えしているのが私自身であると常に描いてきました。新田氏の「殺される」という表現は、決して大げさな事ではなく家族のみで支援する事で起こる現実であり最近もニュースで取り上げられ、支える家族に同情するも殺される側に同情する声が挙がらないのが不思議と言うかそれが現実にあります。

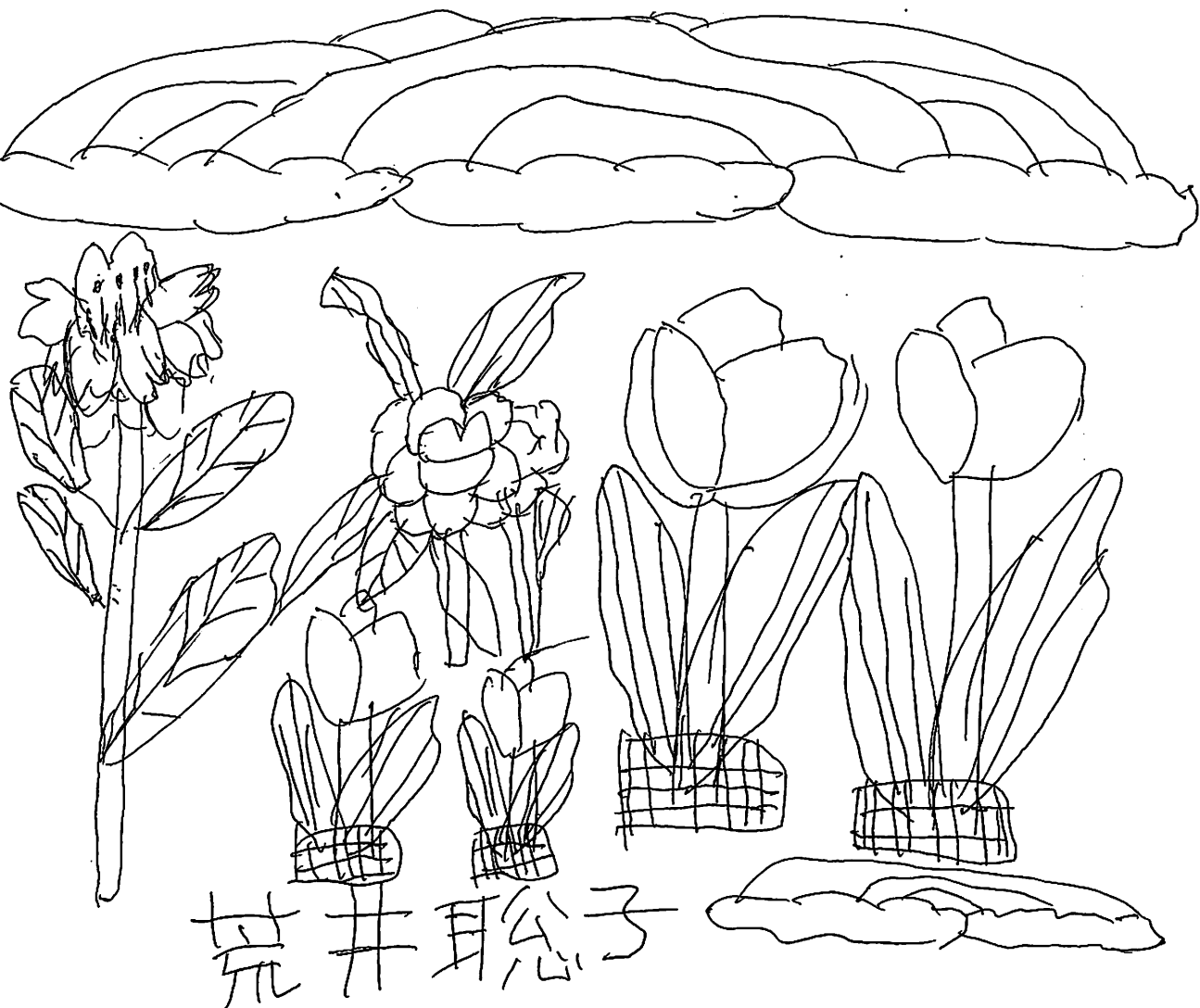
故に、国や行政に訴え、ともに学び・ともに育ち・その先も地域で暮らし続けるために「自立生活」と「自立生活支援」と言う言葉で長年取り組んできたつもりです。

しかし、この40年の中で、地域そのものが孤立化していく。孤立しても成り立つ人はそれで良いかもしれないが、人の手を使い暮らす当事者たちはそうはいかない。

「あたりまえに地域で暮らす」と言い続けてきたその「あたりまえ」が個別化する個人を個別に支援し、当事者と支援者とがセットで地域から孤立していく。

そんな状況が進んでいるように感じると、「一人暮らし」がどこか「入所施設」と変わらない、支援や制度によって「施設化」されていく現実をあれこれ感じる。

「あたりまえ」とか「一人暮らし」と言う言葉の意味を常に捉え返す必要があると思うも、さてどうしたものか？つらつら考える。



りのさとのペランタの 細長いプランターには
クロウカス・シラー。(はこべ。すずめのかたひら。
その中に 黄緑色の幅広い葉がある。放射状
に生じその中心から 細い茎が伸びて。
てっぺんに 米粒より小さい蕾が。4、5個。
ひとつは ピンクの花びらかのぞいている。
さくら草だ。理乃さんのお母さんから。大きな
鉢の 立派なもの。何年か 経って。持っ
てきた。ご近所戸に さくら草を上手に育て
ているかたから。毎年くださるのだ。と。
すばらしく 絢爛な。ちゃんと大事にすれば
翌年も咲いたのだらうか。枯れたと思って。
秋に。春咲きの球根を 植えるプランターに
土を移して 使った。去年は 種か土の中
で眠っていたのだらう。お母さんから いなくなつて
2度目の春。小さく。ほかの 草たちと 仲よく。
風に揺れている。

「理乃さん! すごいわ。さくら草の子。お母さんの持ってきた
さくら草の子だよ。」
理乃さん。今日は雨だから。こんどゆっくり見せよ。
見てね。

夕に出たとき。私は。理乃さんの好きだった
光ゲンジの曲やその頃の。はやた曲をリコーダーで
ふいてみたりする。時には音調子にのって熱唱も
する。理乃さんは。「うー」と言う。一音者に歌っ
て子の? 「へたなと! やめろ!」と言っているの? どちら?
そんなに楽しいと 理乃さんも 楽しいのか。自分だけが
気持ちよくて 理乃さんは 迷惑なのか。やめろとこら
表情。目や体の重さ。そのほか。伝えようとしてく
いるかもしれない。表現させたいと みたさゆな
に。数えきれない表現が。理乃さんにも。聡子
さんにも あったし。ある。それで いいわけない。
理乃さんから。聡子さんから。私は。どう見えているのか。

「あした農場に、ヤギがいる。」ときいて、いつか行ってみたいと思っていた。こんどの日曜午前中、見学会がある。とチラシで知った。その日午後、ちやうどりのさとシフトから入ってるから、ちやうどいい。申し込んだ。その言葉を、礼のように聡子さんと理乃さんにしたら、聡子さんから、「行くきたい。」と言った。この日は雨の予報なので、どうかかな? と思ってそう言ったけど、「行く。」聡子さんもヤギ、女子きみたいた。日ようは、やっぱり雨。それに冷たい風。ツイテない。歩くのはキツイから、バスで夕摩センターから1時間に1本の。聡子さん、ほんとにいいのかな。私に気を遣ってない? いや、聡子さんから、そう決めて、言った言葉を信じなくてどうする? 疑うなんて、まちがってる。「行く。」のだ。

「ケアは、葛藤と車いすの中で実践される。」

聡子さんの、赤へのケア、赤の聡子さんへのケア。どちらも、試行錯誤、でも一緒にひき受けていける。

バスを降りて、山に入っていく細いみち。ぬかるみちを歩く。二手にわかれる。「どちらかな?」「こっちでいいのかな。」また、二手にわかれる。上かな、下かな。ノイバラの芽が出ています。遠くでバエバエ、何かか鳴いてる。

おみ! 「あした農場」ヒツジと馬のシリエットと、野菜の会の看板! おこうで農場のかたへ傘を上下させて合図してくれた。

「あいかとうございます!!」ほっとした。小さく

馬のトラちゃんか、おしゃべりなごはんを食べてる。そのとなりのビニールハウスで、お話をきく。参加者は私と聡子さんだけだった。そのあと火をまねる。30分の見学コース。柵の中でロウいてるのは、大きな2頭の羊。モウモウの。その手前の小屋に、二ワトリか6羽いる。赤いは、「コケッ コケッ、コケッコ。」と二ワトリに言っている。と、「あ。」と聡子さんから、ドロに足をとられ、おへって車込んでしまった。傘で右手がふさがって、左肘と左腰を打ってしまったようだ。「大丈夫?」

聡子さんはすぐ起きあがって、「大丈夫。」と言った。農場のかたかタオルをかして下さった。それで、ドロを拭いた。夢のようにあてきかな景色に舞いあがって、聡子さんへの配慮か、とんでしまっていた。ひとまわりして、帰りのバスに間に合うように、農場をあとにした。あももの枝に芽が出ていた。咲くのを待たない。ヤギは、いなかった。

帰りは下り坂。「気を付けてね。」さきは、赤からうかりして、聡子さん、ごめんね。ゆっくり慎重に歩く。バス停に着いた。標式柱だけ、屋根も囲いもない。歩道もない片側一車線のみち。車たちから、しびきはかきあげて通りすぎる。バス、早く来ないかな。聡子さんは、ダウンジャケットとスボンに、まだ残ってるドロを気にしている。はいと見ると、バス停の時刻表の板に、小さなハンカチタオルか、ひかけてある。たれかの落とし物を、たれかから拾って、わかるようにのせておいたのだらう。ちやうど、悪いけど、いいものか。ちやうどある。ツイテるね。私はそれをしめて、聡子さんのドロを拭いた。雨で洗い、しぼって、また拭いた。きれいにした。でもバスは来ない。向かい側に、逆方向のバスが来て行ってしまった。こちよりあとに来るはずの。少し心配になる。もしかして、もう、行く、ちやうどなのか? たていとう、1時間、待つことになる。私はスマホだけでなく、時計も持ってる。持ってたところ、同じことだけ。聡子さんはスマホ、持ってる。でも、それどうなる。待つしかない。赤「遅いわ。」聡子さん。「うん。」顔は笑ってるけど、手足は冷たい。風が傘をふき飛ばしそうになる。私「寒いでは、大丈夫?」聡子さん「大丈夫。」……バス来ない。車たちはゼンゼン通りすぎる。赤「どうしよう。歩いた方が、いいかな。」聡子さん黙る。ななめのみちを歩けば、バスより近い。30分くらいか? もう、しよーか。ない。歩くか? と道を渡ろうとしたら、あ、雨にけむりかなたから、バスが姿をあらわした。おみ! 私は、大きく手を振った。ツイテる! バスに乗った。座席の下からヒーターの熱か、あたたかくて、あいかにかかった。A。

「聡子さんといふ会」を作った。と、聡子さんに話した。私は、介助をする、というより、介助者として、いる。ことをやってきた。何か起こってほしいように、いるのだ。このころは、介助をするために、いつも通り、予定通りに生活するよう、「利用者」に求めようとは、介助が、多い。まちがっている。いるって強い。一番、しっかりと、いる。のは、理乃さんだ。

6年。私たちは、糸色まず、いた。ここに、トヨタ方式、just in time、必要なとき必要なものを必要だけ、届けるような、そんなロジスティクスをやりたいんじゃない。未知の方向へと可能性を開く、一緒に生きるとき、しるかにかける。そういうのをやりたい。

じゃすみん通信 ～第91回 査の巻～

大野沙彩(じゃすみん)

ただ今病院のベッドの上でパソコンを叩いています。こんなドラマみたいなことが自分にも起こるのかと不思議な感じです。基本的には元気なので、まだ不思議な感じ。山場は手術後でしょうか。まあ、時の流れに身を任せてどうにか耐えるのみ！

映画『査かなる』見てきました(ALSの方のドキュメンタリー映画です)。感想を書こうと思っているのですが、うまく感想が書ける気がしていません。難しいし、言葉のチョイスを間違っような気もしています。が、書きます。とりあえず、一言で言うと「あなたは本当に、目の前の人とちゃんと向き合えていますか？」と諭されたような気がしました。説教されたとかアドバイスされたとか指摘されたとかそういうんじゃなくて、諭された。「ぐわ！」って感じ。もちろん向き合っているつもり。だけどもちろん少々サボる時だってある。サボることが絶対の悪！とも思わないけれど。なので、「反省」ともまた違う感情なんです。何て言えばいいかな、頭の引き出しに入れといて、いつでも出せるようにしておかないといけないなと思ったんです。何かあった時でも、何も無い時でもいつでも「本当にそれで向き合えてる？」と自らを諭していく視点といえますか。それが、一言で言う感想です。

細かく見ていくと、私は真弓さんのシーンがとても印象的というか心にくるものがありました。文字を使っのやりとりも難しい、反応もイマイチわからない真弓さんと、できる限りやりとりしようと向き合う介助者。学生介助者の「分かった！と嬉しい反面、本当にそうなのだろうかという疑念が生まれる」という思いにとっても胸を打たれたというか、わかるなあという気持ちで、本来泣くところではないのかもしれないけれど涙が出ました。脳性麻痺のメンバーとやりとりする時、指で○とか×とか(できる人はひらがな書いているみたいなのですが、私はまだその読み取りができないので○×で)書いてもらうんですけど、マルだ！！と分かって嬉しい反面、私がマルと書いて欲しかったからマルと読み取った？本当にマルだった？と不安になります。相手が言葉でやりとりできる知的当事者だったとしても「これだよね」と思う反面「本当は違うことを訴えてる？」という疑念もあったりします。でも相手が目の前にいるのに「疑念」の方を優先してしまうとコミュニケーションが進まない。だから、疑念はひとまず心にしまって、やりとりを続けていく。一人になった時に疑念を思い返してみたり忘れてみたり。そうやってコミュニケーションを重ねていっているつもりです。疑念というものは解消されるものではないと思うんです。「分かったかも！」の嬉しさをたくさん溜めても「疑念」がゼロになるわけでもない。けど、「分かったかも！」を積み重ねていきたいという気持ちを重ねていって、疑念が溜まることを恐れずコツコツとコミュニケーションを止めないことが大事なんだなあと思わされました。

「疑念」に関しては、同じ疑念(疑念の中身が同じとは限らない)を持つであろう「仲間」「同僚」とのなんでもない雑談をすることで、「これであってるのかな？」の不安ためないというのが大事な気がします。みんなおんなじように「合ってる？」「これでいいの？」と思いながら進んでいるんだと思えるだけで心は軽くなると思うんですよ。これ、でも、仲間との温度感とか考え方の根本が似てないと厳しいんですが…。もう、終わる。珍しく、行数足りなかった！

行ったり来たりして考えていることなど13

井上武史

さて、先月は現在ラテンアメリカで導入が進むケアシステムがここまでたどり着く経緯をととても簡略に説明しました。

今回はもう少し詳しく辿りなおしながら付け加えておきたいと思います。ぼくが前回書いたような調査にはぼくが初めて知る驚くような世界の動きがあり、今ぼくらが目の前にしている世界の激動する変化を考えるうえでも、どういう方向に進めばいいのか示唆を与えてくれるだろうとも考えます。

1960年代から70年代にかけては、ぼくらがよく知る障害者の解放運動もその中に含む、世界中でマイノリティの運動が各地で始まって展開して行った時代でした。前回お知らせした1975年のメキシコでの第一回国連世界女性会議には、こうした時代的背景がありました。1945年、第二次世界大戦後の世界秩序の構築を目的にできた国際連合は、当初から国家のコミットメントが不透明であって仕切れないのを、市民社会の参加によって補うことを戦略としてしました。女性問題は、1946年から社会経済理事会の下に女性の地位委員会が設置されそこで議論されていましたが、会議にはNGOなど女性団体が入り、世界会議などには、国の代表者の他に大量の市民団体からの参加がありました。その頂点となったのが1995年北京で開かれた第4回の世界女性会議で、ここから世界では本格的な女性の社会参加が始まったと言っても過言ではないです。これ以後世界会議は開かれておらず、北京+5、北京+10と言った形でフォローアップの会議が開かれているだけです。今年はまさに今ごろニューヨークの国連本部で北京+30の会議が開かれています。

北京の世界女性会議は今でも語り継がれるくらい女性運動の中では画期的な会議で、このときのスローガンは女性のエンパワメントでした。国連が民間の女性を頼りにし、また国連の後押しを受けた女性たちが自信を付けて運動を進めていくというまさに二人三脚でここまで来たことがわかります。ラテンアメリカではとくに今世紀に入ってから、先住民や女性運動が激しく盛り上がっており、ここ数年は世界の女性運動の発信源になっているくらいです。ちょうど、前号で触れたダラコスタやフェデリーチェから人世代回った世代がさらに当時の運動を、理論的にも洗練させながら再現しているような盛り上がりを見せています。

コロナ禍を挟んで最も激しさを増していき、コロナ禍で浮かんだ社会の問題を解決する方策として計画されたのが、前号からお話ししているケアの社会化の提案でした。ちょうど1970年代のフェミニストの運動を受けて議論が始まったケアの労働化が、ラテンアメリカでの女性運動のリバイバルを捉えて国連のラテンアメリカ経済委員会が勢いを借りて制度化しようとしているのが現在です。

社会へ向けてその12

立野 陽太

ゆたかカレッジ早稲田キャンパスでは2月28日に
研究論文発表会(本選会)が行われました。
各キャンパスから2名または3名が本選に
出場します。今年度の参加校は「横浜キャンパス」
「川崎キャンパス」、「江戸川キャンパス」、「埼玉キャン
パス」、「立川キャンパス」などです。早稲田キャンパスの
本選出場者は9時45分に亀戸駅北口に
集合して、10時からリハーサルを行いました。
12時40分に本番開始台となりました。私の
研究テーマは「不登校について」でしたが、
他にも「私の成長メモリー」や「自分が行った
ターミナル駅」、「良い睡眠について」、「フードロスに
ついて」などがありました。早稲田キャンパスの
同学年の方々が私の発表を応援にきてもら
うことができ、とてもうれしかったです。

【続・たこの木通信発行作業大ピンチ！！】

岩橋誠治

ここ数ヶ月。手伝ってくれていた常連の方が怪我で入院。介助者不足ではたなのたねで対応と発行作業の人手不足状態が続いています。たこの木通信発行作業日が近づくと、「今月の通信は無事に発行できるだろうか？」という不安が膨れ上がります。たこの木の活動の中で、唯一作業らしい活動で、ひたすら作業をこなせば終わるもの。でも、最近では、膨れ上がる不安を抱きつつも「結果オーライ」と言う結果が他の日の活動と変わらないと感じています。

ならば、「発行作業大ピンチ」とばかり訴え、「気軽に手伝う」と呼びかけつつも尻込みする方たちもいると思うので、今回は作業の「楽しさ」をちょっとお伝えしたいと思います。

今月号で 449 号となるたこの木通信。飽き性の私が 449 回もの発行作業を飽きもせず取り組んでいるのは、常に違った風景がそこに現れるからです。すなわち「飽きる間がない」という感じです。どれほど回を重ねても 1 回たりとも同じではない発行作業風景。これは、毎回参加するからこそ気づくという大きな楽しみの一つです。

そして、当事者たちが積極的に手伝ってくれています。早くから来る人はスタッフが公民館へ荷物を運び込む前から待っていてくれる方もいます。又、仕事を終えてから駆け付けてくれる方もいます。作業終了後のお茶会にのみ参加しているように見えた当事者もここ最近作業が遅くまでかかっているの、時間との勝負をしている時に現れ、何やかやと手伝ってくれてとてもありがたい存在としてこれまで描いていた想いを改めさせられます。

ボランティアセンターでの出会いを通じ、毎月発行作業を手伝ってくれるようになった方は、先日の餅つきにも参加してくれ、発行作業を介して拡がる関係がとても嬉しいです。

印刷と紙折作業は公民館の狭い印刷室で行うため、私と横田さんの二人で対応していますが、その後の帳合や発送作業は公民館やボランティアセンターの活動室等を使い、集まってくれた方たちと和気あいあいとそれぞれのペースで行っています。

願わくば、公民館の部屋に籠って作業をするよりも、開かれたボラセンの活動室の方が、様々な出会いが生まれるのでそちらでやりたいと思うのですが、午前中は活動室が埋まっているため、午前/午後と作業場所の移動が必要になり、そのような余裕もないため午前と午後の通しで公民館の一室を借りて作業をしています。

逆に、ボラセンから公民館へと作業の場所を変えた事で、当初は超久しぶりに現れたたこの木の面々と既に見知らぬ人となった職員の人たちと言う関係でしたが、毎月第 3 木曜日に現れるたこの木の面々。そして、印刷物の見本としてたこの木通信とねじり草を職員の方々に直接手渡しするようになり顔見知りになっていく。先月は「いつも楽しみにしています」と声をかけられ、たこの木と関わる人たちの存在が認知されていく事をうれしく感じました。

発行作業の内容としては、印刷⇒紙折⇒(場所の移動)⇒帳合の順。加えて発送作業は、出来上がった「たこの木通信」と「ねじり草」を縦半分に折る⇒帯をかける⇒(郵便局へと運ぶ)大袋に詰める。と言う順。

午前中は、印刷/紙折は公民館の印刷室。帳合以降の作業は公民館等の一室に分かれ、順次印刷室から運び込まれたページを同時進行で帳合作業を行います。互いに見えない場所で当事者たちが中心に帳合作業を進めているのは、ドキドキワクワクものです。時に、大失敗で余計に時間がかかるという月もありますが、回を重ねるごとに要領よくなっていく当事者たち

を心強く感じています。

多くの人の感覚としては単純な作業です。でも、当事者たちとともに進めていくと実はとても奥の深い作業に思えてきます。たこの木通信の至上命題は、「郵便局が閉まるまでに持っていく」と言う事。それを成すためには、いかに効率よくテキパキと作業をこなすという事になるのですが、「そうは問屋が許さない」と言うのが通信発送作業。

「得意な作業を分担する」だけでは済まず、「やれる作業」「やれるようになっていく作業」や「やりたい作業」等々、手伝って頂いている方たちの想いも含め、段取りや分担を組んでいく。

不思議な事に、思いの外たくさんの方が集まってくれた月はいつも以上に早く終わると思いきや、様々な作業が錯綜しかえって時間かかってしまうという事があります。最短記録を出した時は、人数が多い月ではなく互いが良く知っている人たちのみで作業を行った月。作業人数よりもいかに集まった人たちと組んで作業ができたかにかかっているように思います。

午後になると一室にみんなが揃いともに作業をこなしていきます。積まれた印刷物の山の数が帳合が進むにつれて減っていきます。初めは、山の数に「いつ終わるのだろうか」と永遠に続きそうな感覚。それがふと減ってることに気づくとやる気が高まる。でも、長丁場故にスピードが落ちてくる。するとそこへ新たな人が現れてスピードが回復。と言う感じ。故に、「ほんの少しの時間でも」関わってもらえると助かるというのは実感です。

作業を進める手よりも、口の方が滑らかな人もいます。さすがに、作業の手を止めて対応を求められると困ってしまいますが、手を動かしながら口の方が滑らかな人とやり取りしていると、単純作業も楽しくなってきます。

会話の内容は、各々の1ヶ月の様子もあれば、いつもと同じ話を繰り返しているという事もあります。又、言葉での会話ではなく、唸り声やリアクションで会話に混ざる人もいます。

一月の近況報告を伺えるのは楽しいです。それと同様に同じ話を繰り返しているその内容も、一ヶ月という時間の経過の中で、新たな発見があったり、誤解して受け取っていたことの反省の機会であったりします。もちろん、毎月関わっていると「同じ話」になるのですが、スポットで関わると「初めて聞く話」となり、その話の受け止め方は様々なゆえに傍で聞いていると全く違う話をしているようにも感じて楽しいです。

毎月の発行作業で思うことは、能力の優劣ではなくいかに組んで取り組むかという点と当事者たちに対して「やりなさい」ではなく「手伝って頂きたい」と言う関係から見える各々の積極的な関わり。

「誰が障害者」で「誰が障害者でないか」と言う話よりも、「こんな人」がいる「あんな人」がいると互いに知り合っていく関係が、たこの木通信と言う具体的な成果物を介して気づきあっていける機会がたこの木通信発行作業と言う場なんだろうと感じます。

そして、「今回は作業の楽しさをちょっとお伝えしたい」と書き綴りましたが、これは全て私自身が「楽しい」と思えるだけのこと。

どこかに各々の「楽しさがある」から常連となっていくのでしょうか、その「楽しさ」は人それぞれ。「人は見たいものしか見れない」と誰かが言っていましたが、他者が何を観ているかを探るのも私にとっては楽しみの一つです。

と言う事で、毎月第三木曜日に行っているたこの木通信発行作業。

是非、手伝って頂けると幸いです！！

フィットする支援をめざす会

本の差し入れ(2月の面会～歴史の話)

2/28にTさんと面会しました。「本の差し入れ」の話が多かったです。「荒木さんとAさんとBさんに頼んだのに、届かない！」戻って会に報告したところ、Aさんからは「本が見つからないと連絡したんだけど・・・」Bさんからは「頼まれた本を送ったはずだけど・・・」。私への依頼は「旅行会社のパンフレット」でしたが、ある号を指定して購入できるものではなく、その説明は以前しましたがスッキリしてないようです。

定例会で話し合いました。本の差し入れは保佐人に頼むことになっていますが(刑務所に入る業者から買えますが種類は少ないはず)、他のメンバーに多くの依頼が来ます。その理由を考えました。希望通りに届かないから「代わりの人」に頼むこともあるし、相手とのやり取りを楽しんでいることもあるようです。Tさんから「この本を読んでほしい」とメンバーに本が宅下げされた後で「差し入れのお願い」が来ることもあり、プレゼントの「お返し」への期待もありそうです。

休日、近所の図書館で「刑務所内図書館」の本が目に残りました。長野刑務所の取り組みに一章が割かれていました。わが国で最初の「所内図書館」は長野だそうです。当時の所長が熱心な方で、職員1名を1か月、県立図書館で修行させて開設した。いま会では、所内での「合理的配慮」について改善を求めて動いています。注文をつけることもあります、受刑者のより良い処遇のために取り組んできた歴史も忘れないようにしたいです。

疑問だったことを調べました。本の差し入れの自由度は別格です。受刑中に差し入れられるのは現金・手紙・本(と売店の日用品)だけ。一般のイメージとちがってアダルト系も可、刑務所によって違うものの犯罪に結びつくもの以外はだいたい届きます(「被収容者の書籍等の閲覧に関する訓令」で検索)。他のことは細かく管理されているのに不思議でした。

原点は「図書教化主義」でした。明治の「佃田徒場」の時代に、更生の教材として儒教の「四書」などを受刑者に貸していた。しだいに「余暇としての読書」として扱われ、懲罰として「読書の禁止」が入るように(最初は無かった)。「官本主義」というのは「教化主義」に基づいて更生に資する本を刑務所が購入するが、個人で購入する「私本」は管理・制限するというもの(何しろ私本はチェックの労力が大きい)。「教化か余暇か」、また「官本か私本か」という力の入れどころは時代によって(おそらく所長によっても)変化した。2002年の名古屋刑務所での虐待事件を機に成立した刑事施設処遇法に「私本の閲覧を原則として制限してはならない」と全国一律の規定が入りました。その後上に挙げた「訓令」が出されています。いま自由に差し入れができるのは歴史的な経緯があるのですね。(荒木)

毎月オンラインでやっている定例会をのぞきにきてください。【4月は4/1火曜 9:30-21:30です】

連絡先:takonoki@dream.jp(横田宛) 面会の交通費が足りません。少額でも助かりますのでカンパをおねがいします！【ゆづり(郵便局から)00130-7-359996(銀行から)〇ー九店 当座預金 0359996 名義:フィットする支援をめざす会】

も く じ

・表紙	1
・第3回たこの木連続講座は6月1日か22日になりそうです③	2
・重度訪問介護対象拡大から10年 何かイベントやりませんか? 6	4
・何のための厚労省交渉なのか	6
・#shienin あたふた	8
・「時間」70	9
・死なないための家2 死なないための「屋根工事」	10
・たこの木インフォメーション	12
・知的障害者の自立生活(支援つきひとり暮らし)に関する課題?	14
・世界の片隅で支援をつぶやく120 ～～	15
・荒井聡子	16
・じゃすみん通信 ～第91回 査の巻～	18
・行ったり来たりして考えていることなど 13	19
・社会に向けて その11	20
・続・たこの木通信発行作業大ピンチ!!	21
・フィットする支援をめざす会	23
・もくじ・編集後記	24
ねじり草 第192号	
・すいいち日記	2
・すいいち企画しませんか	4

編集後記

・この1ヶ月は全く予想もできなかった出来事が立て続けに起こり、あたふたし続けていました。ふと、毎年2月の通信を発行した後から5月の連休頃まで想像もしていなかった事が起こっていると気づきました。

そして、昔は地域から奪われそうになる状況を何とかしなければで取り組み始め、おおよそ半年後に「自立生活」や「自立生活に向けた取り組み」へとつながっていく。「概ね9月に自立生活を始めると当事者の暮らしが廻り易い」と言って来たけど、それ以前に起こっている事の対応の結果が9月と言うことかもしれないと感じました。

・たこの木通信発行作業の楽しさを書いたつもりが、単に私の楽しみ方になったかも。そして、発送作業日前の原稿締め切り日に向けてご投稿いただける方たちがいる事にも感謝。

・今月のたこの木通信作業日は春分の日と言う事で、いつもの郵便局は休みのため本局へ持ち込まなければならず、休みに合わせて帰省する人がいて、いったいどうなるか?

・とにもかくにも、「何とかするしかない」だけを思考し取り組み、ここまでやって来たけど、若い時と違い気力と体力が伴ってこない事にそろそろ気づき始めている昨今。 せ

発行人:障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 世田谷区祖師谷 3-1-17-102

編集人:たこの木クラブ

〒206-0025 多摩市永山 1-1-4 ルミエール 103

☎/📠 042-389-1378

定 価:100 円